

ふるまちしゅうへん

古町周辺地区

(新潟県新潟市)

- 計 画 期 間 平成 27 年度～令和 2 年度
- 面 積 54.8 h a
- 交付対象事業費 6,584.7 百万円
- 市人口 776,468 人

ポイント 教育文化施設等の誘致による再開発事業を中心とした都市の再構築

地区概要 中心市街地の衰退が進んでいる本地区において、再開発事業により公益施設を集約するなど利便性を向上させるとともに、歴史や文化を活かした賑わいの創出を図る。

目 標 大目標：旧百貨店跡地の再開発及び新バスシステムの導入を契機とした中心市街地の再生と歴史や文化を活かした賑わいの創出

目標 1：公共公益施設を集約することによる古町周辺の利便性の向上

目標 2：湊町新潟の歴史や文化を活かした魅力の向上と賑わいの創出

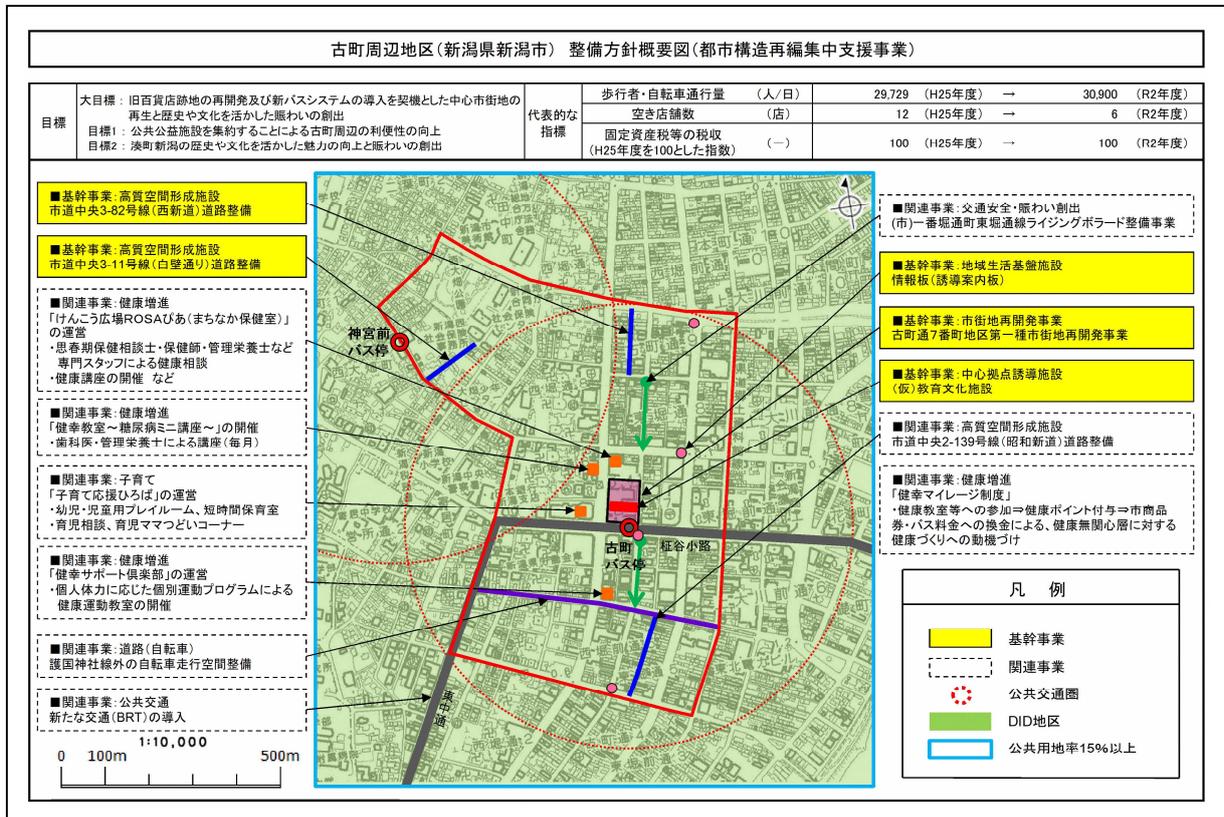
指 標

賑わい度、回遊性を把握する指標として、歩行者・自転車通行量の他、集客性を把握する指標として空き店舗数、また、拠点性や魅力度を把握する指標として古町地区の固定資産税等の税収を評価指標として設定している。

項目	従前値 (H25)		実績値	
歩行者・自転車通行量(人/日)	29,729	→	21,102	(R3)
空き店舗数(店)	12	→	19	(R3)
固定資産税等の税収 (H25年度を100とした指数)	100	→	89	(R3)

事業内容

基幹事業（6,584.7 百万円） → 誘導案内板(5基, 20箇所)、古町通7番町地区第一種市街地再開発事業、中央3-82号線(西新道)、中央3-11号線(白壁通り)、中心拠点誘導施設（(仮)教育文化施設）



地区の現況と課題

地区の現況

古町周辺地区は、二大百貨店を中心に、新潟市内さらには新潟県内最大の繁華街として栄えてきた新潟市の「顔」となっている地区である。ここは、新潟市の都市活動の拠点として古町、万代新潟駅周辺を包含した「都心」として位置付けられている。しかしながら、万代地区に大型スーパー等が出店した頃から古町の繁栄にも陰りが見え始め、市街地の拡大による人口の拡散や、無料の駐車場を完備した郊外の大型店に人々の足が移っていったことから、歩行者通行量等が年々減少しており、まちの賑わいが失われつつある。

地区の課題

本地区を含む中心市街地は、これまでの人口増加、都市の拡大成長を前提としたまちづくりを進めてきた結果、様々な都市機能が郊外へ拡散し、過度に車に頼ったライフスタイルや、都市経営コストの増大など様々な弊害を生むと同時に賑わいが失われてきている。

人口減少、超高齢社会を迎える今後のまちづくりの方向性として、様々な都市機能がコンパクトに集積し、生活拠点となるまちに再生し、歩いて暮らせるまちづくりを進める必要がある。



中央 3-82 号線（西新道）



中央 3-11 号線（白壁通り）

計画策定プロセス

まちなか再生本部会議

平成 21 年の百貨店撤退表明をきっかけに、新潟市長を本部長に古町・榎谷小路周辺の商業団体と大型店、経済団体、有識者、市民、NPO の各分野により構成された「新潟市まちなか再生本部会議」が設置された。同会議では、喫緊のまちなか再生に向けた緊急・短期対策から、本市の背骨である都心軸（新潟駅～万代～萬代橋～古町・榎谷小路）に必要な都市機能や、都市イメージ・ブランドを作る議論をする中で、古町周辺地区の目指すべき姿やまちづくりの方向性、コンセプト、中長期的な課題への提案などが、平成 24 年 3 月に報告書に取りまとめられた。この報告書で提案された取り組みをもとに「古町周辺地区都市再生整備計画」を作成した。

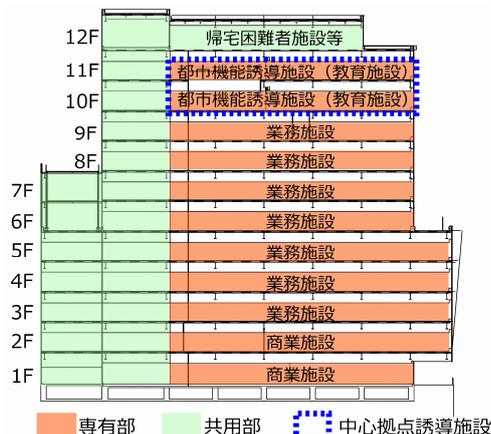
にいがた未来ビジョン（新潟市総合計画）

平成 27～34 年度までを計画期間とする「にいがた未来ビジョン」において、本市が目指すべき 3 つの都市像を掲げている。

その内のひとつ「田園と都市が織りなす、環境健康都市」の実現に向け、新潟駅前・万代・古町を連動させた都市機能の向上による中心市街地の再構築や、堀割や商家、花街などの湊町としての歴史や文化を活かした景観づくりに取り組み、都心軸を明確化し、政令市新潟の顔としての都心の再生を図ることとしている。



再開発ビル（古町通 7 番町地区
第一種市街地再開発事業）



再開発ビルの断面イメージ